原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第二百四号

原告団レポート

CO患者――金子賢一さん

十日余りの採炭工

奇しくも十一月九日、愛娘を失う

この年月、頼れないのが悲劇

上の写真は三池闘争後の昭和36年ごろ、三池労組三川支部の分会対抗駅伝大会を終えて、常一番機械分会の仲間たちと。（中列、右端の人）

昭和44年1月3日、啓子さんの実家の前で。今は亡き砂恵美ちやんも一緒に。

やっと家が

サツキの花が真っ盛りで、所狭しと花を競っている。およそ百鉢もあるだろうか。

「もらったものや、さし木からのもので本格的ではないから―。それでも水をやるのが大変……」と金子賢一さん（昭和七年三月七日生まれ、五十歳）。

ここは大牟田市橘九三の二。古くは尾尻という部落で、国道沿いにほんの小さな丘とでもいうのか、かっては諏訪神社がひとつきりだったとか。

賢一さんはここで生まれ育ったのだが、一時荒尾市緑が丘社宅の若葉町に住んでいたこともある。あの昭和三十八年十一月九日の三川鉱炭じん爆発で被災した、その前後のことである。

昭和四十四年に実兄から「家を建てんか」と話しがあった。「土地も持たんし、金もなか」と、そのときは家を建てることなどおよびもつかなかったが、結局実兄から土地を譲り受け、九電社宅の払い下げ古材で建てることになった。

叔父さんが大工さんなのでその手をわずらわせ、最初は二間と台所で、釘穴のある黒い柱、荒壁のままで入った。「こんなバラックより社宅の方がよかばい」といったことだった。

その家も、柱には上から化粧板を張り、壁も塗り、子供の部屋、玄関と少しずつ手を入れ、ようやく十年経って家らしくなった。

もとは大工

いまこの家に、賢一さんと奥さんの啓（ひろ）子さん（昭和十二年生まれ、四十四歳）、そしてまはひとり娘となった瑞美（みずみ）さん（昭和三十五年生まれ、二十一歳、短大卒、青年会議所勤務）の三人で住んでいる。賢一さんはもともと大工さん――。

二十一年に銀水高等小学校を出て、その年の四月一日に三池鉱業所の建設部に養成工として入り、鉱山学校に週二回通いながら腕を磨いた。

二十八年配置転換で三川鉱へ。坑内では切羽関係の機械工で、その職場はきつかった。しかし彼は頑張った。二十六年から坑内に入った一年間を加えて、四年間三池工業高校の化学科（夜間）に通い卒業している。「勉強は好きではなかった。友達に一緒に行かんかと、願書から何から準備してもらって……。誘われて行ったので向学心とは違う」というが、「数学は得意だった」ようである。

労働のかたわら、四年間の夜間高校を卒えるのは努力なしにはできないことである。

決めた結婚

「趣味なんかなかった」というのだが、この期間、賢一さんは駅伝の選手だった。

九州一周駅伝などにも出場するような、早い人たちがいたが、転出したあと、「走ってみんか」と誘われて走りだしたところ、もともと素質があったものか速かったので、指導者から目をかけられた。そしてさまざまな駅伝大会で活躍する。「あん頃は裸足で練習しよったですばい」と当時をふり返る。そのほかにも、山登りや写真などにも手を染め、多感な青春時代を過した。

啓子さんとの結婚は三十四年十二月。荒尾市平山の実家は農業だったが、その頃啓子さんは編物に通っていた。近所に同じ三川鉱で働いている人がいての紹介。

賢一さんには「なんさまよか娘がおるけん見合いばせんか」と持ちかけられた。いよいよ見合いとなり、賢一さんに異存のあろうはずがなかった。

啓子さんは「今だからいえるけれど、二、三回会っただけで、そんだった」といって幾日経っても、おしめを替える度にのぞく。

母親が見舞いにきても、そのときはいいのだが、帰ったあと「いつきたつか」という。啓子さんはそのたびに情けなく、つらい思いをするのだった。

自宅の庭狭しとばかり、花を競うサツキの鉢に囲まれて賢一さんと啓子さん夫婦。

三十六昇で

三十八年十月の末、賢一さんは払採炭工となる。常一番の機械ではあったが差別もあり、「若いうちにうんとがま出しておこう」という気持だった。

採炭工になって十日余り、その日は二番方で入坑していた。三川鉱の第二斜坑で炭じん爆発が起こったのが午後三時十五分。本層三十六昇の新払にいた賢一さんが、COガスにまきこまれたのは四時過ぎごろである。

異状を知って退避する。ガスの中を小走りに走った。先を稲垣さんという同僚が走っていたが、突然人員昇降のための竪坑に落ちた。のちに聞いた話では梯子に引っ掛っていたそうだ。

とにかくそこを避けたものの賢一さんも倒れ、その前後の記憶は全くない。彼は担送で救出され、宮浦鉱の坑口から天領病院へ運ばれる。のちの調査によれば意識混濁の時間は二十一時間とある。

元気過ぎる

その時間、啓子さんは若葉町社宅の家と、地域の闘争本部を行ったり来たりして気が気ではなかった。

「坑内では何百人も倒れているという話があったし、その夜の十二時頃からあとの者は死んでいるという話も聞きました。明け方四時近くなってもう駄目だと思い、ふーと小さい子供はどうなるのかとか、葬式は、などとつぎつぎと頭が混乱して……」動く気力が無くなってしまった。

十日の朝、ようやく明るくなったとき、友達が駆け込んできた。「元気だった」――と。すぐさま天領病院へ。確かに元気がよかった。よすぎるのである。裸であばれる。見さかいなくおめく――。

そのまま天領病院に入院。啓子さんは二人目の娘、砂恵美（さえみ）ちゃん（三十八年生まれ）を連れている。「そらだれか。俺の子か」「男か女か」「名前はなんだったが、よほど啓子さんに魅せられたのであろう。

愛娘の死に

四十三年一月退院。家に帰っても「抑うつ」というのだろうか「しゃべらない日が多く、生活のこと、子供のこといろいろ相談しても、感情がないのだろうか」と思ったという。その後、ぎょう舌になり怒ることが多くなったり、ときには啓子さんにも手をかけることもあった。

五十五年、奇しくも十一月九日療養の甲斐もなく、次女砂恵美さんが「白血病」のために亡くなった。夏休みが明日からという日、体がきつかといったりしているので近くの済生会病院へ。そして久留米医大に入院した。「けんかをしないで…」という砂恵美さんの声。死ぬまで二人の親のことを心配していた娘。「心に傷を受けながら、いやな思いをしながら死んだのではなかったか」と痛みが残る。自慢の子だったのに……。

高校三年生で短い命を終えた砂恵子さん。「身替りではなかったのか」と忘れ得ない。

物忘れが…

暗記力は抜群だったという賢一さんだが、四十四年頃から始めた囲碁も二、三日するとすぐ手を忘れてしまう。「決めたこと、日時や行先、頼んだことなど朝いうとよいのですが、前日からでは駄目」と啓子さん。

「頼れないのが悲劇……」ともいう。会社がこんな体にしたのだとあきらめるよりほかはないが「この悲劇の十九年はお金には変えられない」と語るのだった。